

れ評するに過ぎず、而して少数の技術者さへ筋骨必ずしも發達せず、疾病の豫防尙更覺束なく、往々常人より病多し。夫れ然り、即ち體育は竟に何を以て目的とするか、有る所の目的は如何にして達せんとするか。

旅行

凡そ旅行は圖書館と共に文字あるものにとりての二大學校なり。人をしで人生の多趣を味はしめ、天然の風興に感ぜしむるもの、旅行に若くはなし。有名なる學者文人の手に成れる旅行記が、吾人に對して最も有益なる教訓を興ふるは、是がためなり。畢竟、旅行記の眞價は山川を叙し、風俗を記すの外、更に一双の活眼を以て、自然人生の眞面白を描破する所に存す。今の所謂旅行記、是の如きを得たるもの果して幾人ぞ。

温泉の目的

暑中温泉に行く者、目的一ならず、大別して六。

療病、其の多くは百姓町人、但し暑中には限らず。
保養、餘り多忙なので閉口しきる、今の中保養せればなど陳ずる者、キザ者流たると言ふ迄もなし、眞に保養を旨とする者は斯る雜沓の時に於てせず。

規則、暑くなれば何處ぞに行くべきものと思ひ、毎年規則の如く出掛くる者、此の規則遵守の輩少からず、別荘涼しきにも非ず、旅宿靜なるにも非ざれど、出掛れば氣が濟まず、出掛さへすれば熱くても氣が濟むなり。

取調、官の取調、會社の取調、著述、翻譯、いろくあり、机を控へ本を並べ折りく窓越し若しくは廊下の方を睨一睨するの徒は先づ此連中なり、八月の末、時日の早く過ぐるに憫るゝを慣例とす。
相談、顯官ちふ者はに於てし、實業家ちふ者はに於てし、盜賊ちふ者、詐僞師ちふ者亦是に於てす。
廣告、身分のすばらしさを示さんとする者、紳士の聚れるを見込みて取入らんとする者、洵に殺風景の至りとす。

登山

文芽の『富士詣』、如何にも造作なし、さう造作なくには富士山も定めし本意なく思ふなるべし、野中夫婦が山籠りしてより山の相場頓に下落し、今は金剛杖も何の興なけれど、元と是れ野中といふ剛の者の堪へ得たる所又は文芽の如き足達者の屁とも思はぬ所、常人に在ては甚だ難儀の山

なるも舊に依て舊の如く、一度行かぬ馬鹿、二度行く馬鹿、この諺は今猶ほ改むるに由なし、登り易からんには、譬へばエレヴェトルにて登り得んには、二度行くは馬鹿どころか、三度も五度も、十度も可、淺草淺雲閣が商賣に爲る世の中、頼りに富士に登りて東海東山を瞰下す、誰か之を妙とせざらんや、たと今日其の難きを愛ふるのみ。惟ふに登るの難易は體格にて定まる、肥滿せる者、肺量の少き者、頭痛持ちの者、此等は最も禁物なるが如し、五尺に足らぬ小男山極めて強健、平素之を嗤笑する者、爲に大に閉口する事あり。

天行健

花は散り花は咲き、月は虧け月は満ち、人は死し人は生れ、日は入り日は出て、一寒一暑冬去り春來り、快晴あり風雨あり、雷霆あり地震あり、宇宙の現象千狀萬態にして、人は其の間に立ちて、喜怒あり、哀樂あり、愛あり、惡あり、然りと雖も天言はず、四時行はれて間斷あるなく、百物生じて盡くる時なし、茲に於てか古の聖人は之を觀て、『天行健なり』となし、以て之に倣はんことを希ひたり、『易』の全精神は實にこれなり。天行健なり、秋風枯木を吹き寒威凜烈膚を劈き、萬物陰々たるの時あり

と雖、天何をか怨み何をか悲しまん、言ふことなく、歎くことなく、剛健以て息ふことなし。天行健なり、一陽來復して開發の氣は勃然として興起し、萬物皆其時を得るを樂しむ、天行健なり、榮枯得喪亦何ぞ意に介するものあらん。

時、閉塞して通ぜず、運籌屈して伸びず、言行はれず、意達せざることあるは人間の常時のみ。然りと雖、天行健なり、陰極まれば陽に變ず、又何をか憂ひ、何をか悲しまん、生々を主義とせるものは此くの如きのみ。

花は散り、人は死す、然りと雖花は咲き人は生る、亦何ぞ無常を悲しまん、ゲーテのファスト中の死の精靈は歎じて曰く『我れ洪水を以て、暴風を以て、又雷霆を以て、生々を破壊せんと試みしと雖、萬物毫も破れず、海陸存して依然たり、我れ無數の群を墓中に投ぜしを幾度ぞ、然りと雖も毫も効なく、却て新鮮活潑なる血液は搏動循環して益々生々たり、我れ之を切齒すと雖も亦如何ともすることなし、水より、空氣より、又土地より、生命の萌芽は益々發生せり』と、天行健なり、退隱、無能、悲哀、死滅等の動かし得る所に非ず。ロングフェローの語を借りて云はば、

働け、働け、毎明日は必ず今日よりも優れる進歩を爲さざる可からず、今年に昨年より優る所あらしめざる可からず、吾等憤起して事に従ひ、如何なる運命に遭はんとも、撓まず進みて其功を期すべきなり、生々たるべし、活潑たるべし、日に新なる意氣を有すべし、失望するなく、怨恨するなく、常に快活なる心を以て事を成すべし、剛健光明はこれ大人の心とせる所、日新これ聖人の教なり、天行健なり、君子自ら彊ふして息まず。

小成に安んず

『生子應如玉、娶妻應如花、丈夫天下志、四十未成家』、今の世の日本人は、何ぞ家を成すに急なるや。古來家祿に衣食せし習慣今に残りて、子が自活し得るに至らば、親ははやく隠居して、子の驕をかじらむとす。親族の窮せるものよりてたかりて其給助を仰がんとす。今の人士は幾んど先天的にかゝる重荷を負へる也。かて、加へて自活し得るより早く、急ぎて妻を迎ふる也。おそくも二十六七にして夫となる也。また父となる也。志業未だ緒に就かずして係累既に多し。折角の秀才も、一家の經營に追はれて志縮まり、學業進まず。あはれや二毛未だ頭に生ぜざるに、

既に精神的に老朽し、活氣うせて、冒險的事業などは思ひもよらず、小成に滞りて、大成するに由なし。畢竟するにこれ家を成すに急なるの致す所也。

けち臭き話

頼山陽、日野大納言の招待に接し、酒肴の注文を述べて云ふ、魚は琵琶湖の鮮に非ずんば喫する能はず、酒は伊丹の醸に非ずんば飲む能はずと、時人以て山陽の漫を議せり。然るに京都に在て琵琶湖の鮮を得る甚だ容易、伊丹の醸を得る甚だ容易、當時汽車の便なかりしと雖も、此の如きは實に容易の事、日野大納言は注文せられずとも之を供せしならん、山陽の故さらに云々せしは、京都人士の儉薄にして、月卿雲客も酒肴を粗にせしが爲なるべきか、何にせよケチ臭き話なり。

家康の木乃伊

我國に木乃伊なし、木乃伊の術ありしと假定するも能く人を木乃伊にし、或は自ら木乃伊たらしんとする者あるべかりしや否やは疑はし、邦人は埃及人と思想を異にする者あればなり。然れども屍を永遠に保存せんとするの念は之れ無かりしにあらず、諸大名は必ず此に苦心したりし

なるべく、乃ち木乃伊のごとく数千歳に傳ふる能はずと雖、數百歳に傳ふるを得、或は慶長元和の屍にして今に至て猶ほ軀の敗壞せざる者あるやも知るべからず、日光の東照廟はあらゆる手段を施し、爲め、今日家康を視んと欲す、其れ若しくは之を能くするを得んか。

天才

天才が斯の如く盛大且つ永遠の名譽を有し得る所以の者は、大世界の道義的運行に對して、若干の貢獻をなしたる爲なり。希臘は亡び、羅馬は跡なく、邦家の興亡掌を覆すが如きも、古今東西の歴史を貫通し、人道は毫も其運行を渝へず。人生のあらゆる正義、あらゆる道徳、あらゆる價値あるものは、恰も鹿の溪水に下るが如く、磁針の北極を指すが如く、其意識の有無に關せず、皆人道の進歩に對して、多少の貢獻をなしたるなり。天才は個人に顯はれたる人道の一面なり。

先覺者と多數

先覺者といひ、多數といふも、畢竟するに意義甚だ漠然たり。只先覺らしく感じ、多數らしく感ずるあるが、此の感ずるといふが即ち運動の基たるべし。議論は出來ずとも、感ずるとの強き者は、なか／＼負けやう

とはせざるなり、彌次馬の出づるも、此等が出てざるべからざる必要あるに因るものにて、大勢がわめき合ひ、たゞき合ひ泣き叫びする中に種々の道理の具はるものならん。

肩書

人爵なる哉、肩書なる哉、稻荷大明神も、正一位の肩書なくば、難有からず。小學教員にも位を授けよと叫ぶ者あり。高等文官試験に及第したる者も學士と稱するを得せしめよと唱ふる者あり。高等商業學校は未だ大學となるを得ざれども、其卒業生は商業學士と稱するを得るに至れり。商業にてはや、長し、他の醫工農にならひて商學士ならば、猶更妙ならむ。とにかくに大學以外の學士はこれがはじめ也。やがて高等師範學校卒業生も、師範學士とか何とか稱するを得るに至るべし。海陸大學の卒業生も亦軍學士、もしくは軍學博士と稱するに至るべき乎。而して特典は私立學校にも及ぼして早稻田大學、女子大學の卒業生も學士とならむことを請求するに至るべし。



酢漿之卷

この巻は、カタバミを紋所とせる愛氷和尚の毒言なり、その味甘からず、鹹からず、酸っぱきはお氣の毒様也。

金と交際

金を貸すは交を断たんとするものなりとは、薄情漢の臺詞也、貸せるだけ貸して仕舞へば別に仔細なき事にて、それが爲に絶交となりたるは、始めより決して交際の成立したるものに非ず。

錦と襪

心には錦を包むとも、表へに襪を纏へば、お給仕には後から來るものと知るべし。

品性と身

中流以上の人は書物を購うて之を飾り、中流以下の人は書籍を買うて之を読む、故に甲は幾百年の後も裝飾品となりて表紙さへ破れず、乙はいつしか文字腹中に入りて、書物は形を失ふに至る、斯の如きは豈に書物の上のみにあらんや、故に品性の優劣は、身分と逆比例を爲す。

兩議院

衆議院には金の爲議案を作る事、其賛成者を勧誘する事を能事とする名士十中八九を占め、貴族院には此の二三割娑婆的智惠の不足なるもの、仙人然或は馬鹿然としますし居れり。

代議士の相場

無學の講釋師、化けて政治家となり、代議士の椅子を得たるものある人物拂底の今の世にも、俳優の代議士となれるものなきは、まだしも見つけものなり。

政治家

所謂政治家なるものは、大風呂敷の成功したるものなり、試に三百の頭顱を見よ、英書はおるか青表紙の讀める者幾人かある。

教育家

小教育家は熱心教務に従事して、俸給の薄きに甘んじ、大教育家は存外教務に冷淡にて、俸給の多きに飽かず、小教育家は一夕料理屋に酔うて追放され、大教育家は妾を畜へて椅子は動かさず。

慈善家

慈善家と評判さるゝ人は、多くは慈善を賣物にして、慈善家と他も知らず我も思はぬ眞の慈善家より、慈善を受けて生活するものなり。

實業家

草鞋姿を町噂に寫眞にしてまで、こげをおとし、到る處被歡迎に日をくらし、平凡の農談をなす人を實業家の親玉とす、抑々實業と稱するもの多くは虚業なり。

博士

博言學位でおどかせば、胡麻化しが利くなど、云ふ先生にして、博士の肩書あり、十年の學費續きて大學を出づれば、其上の多くは政略にして、物を博く識るを要せざる也。

學士

大學卒業生は金箔附の學士なりしが、博士一束以來、其箔も銀箔、眞鍮箔位に成下らんとする時、慶應義塾文學士、法學院學士など、學士販賣の支店出來、猶美術學校美術學士、音樂學士商業學士など、學士の卸賣か出來て、聽て學士の御光にて、到る處まばゆきとなるべし。

虱と志士

虱を捻つて王侯に謁したる志士支那にあり、虱を志士の勳章と唱へし政治家日本にあり、今の元老のいたく衰へたるも、此の勳章の除られし故なるべきか、志士とシ、と、國音相通するも妙也。

落第學者

小説家には學者になり損じたるものが十中八九にして、新林詩家にはせり學者なるが多し、いづれも胡麻化しの上手なる人を大家と謂ふ。

宗匠

身には被布をまとひ、行ひは幫間を眞似、アラリ、シヤラリ、風流を賣物にする人を宗匠といふ、一句の代作料金五錢、初傳の目錄金壹圓五拾錢、金を取ることはなかく、拔目なし。

宗匠と駄句

寒き思ひをして風流を買ひ出しに行く人あり、而して得たる駄句は、一山百文。

碁家と人物

圍碁家には奇零以下の人物極めて多し、則ち圍碁の爲に世事に無頓着となりたる也、今少し有益の事の爲に奇零以下の人物と評さるゝ無頓着も、多く出でんことを望む。

品行方正と薄情

品行方正と評さるゝ知人の小統計を爲したるに、其七八分は他に比して大に薄情なるもの、如し、然らば品行方正と薄情と何の因縁がある、世の多くはツラガシコといふ厭ふべき人を、品行方正と評する也。

正直と横着

人間の最も正直なる時代は、最も人に馬鹿にさるゝ時代なり、少し横着になりてより、却て正直を以て目せらるゝが如し。

正直なる空氣

井を掘つて飲み、田を耕して食ふを好まぬ人は徹頭徹尾正直なる能はず、如何となれば田野の外に正直なる空氣なければなり。

巧言令色

孔子は『巧言令色鮮於仁』と云ひ、東湖は『大嫌ひ唐茄子南瓜薩摩芋君の御前で利口ぶる人』と巧言令色の人を罵る、詐り多き今の世には巧言令色の人ならては、仁者とも謂はれず、智者とも呼ばれず。

學生の墮落

學生の不評判統計をなせば、汚廓にノタレ死する者は醫學學生に多く、食店に殺風景を演ずるものは法學生に多し、一方は他日の外見上にやけたる風采をつくらんとする心掛の蟹行にて、一方は他日の政略上、嚴めしき風采をつくらんとする了見の穿違ひなるべし。

女學生

束髪ならば漸く申譯のたつ容貌を持ち、學問したる爲に高慢になりて、手もつけられぬものを女學生といふ。とは毒言也、學問は標致を引立つるものあれど決して高慢に導く道に非ず、故に高慢は學問の不足より生ずるものにて、學問の爲に高慢となれるなどは、抑も表裏反覆の言といふべし。

情死

情死は戀愛の卒業也、故に情死せし人は、殊に入らしき性情を有せし也。近來流行の情死沙汰は、多くは娑婆に居る能はざる不義理者の拍子よく男女一對したる迄にて、情は殆んど景物の如き姿なれば、是等は皆犬の俱死と言ふべく、決して情死とは言ふべからざるものなり。

女子と地獄

佛教信者は曰く、女は罪業深くして、容易に淨土に入るべからずと、何ぞ誤れるの甚だしき、女は智慧淺き、思慮薄きものなり、如何に重きを置かんと欲するも地獄に行くの價値を與ふるを得んや。

貧乏娘若旦那

分別のなき貧乏娘藝妓となり、才智ある金持の旦那其涎を吸ふ、天下にて治まつたもの也。

世捨人

世を捨てし人は、世の中に不用の人なり、もし市をすて、山に入らんとする人あらば、山を捨て、海に入るべし、憂の捨所は山にあらずして海なり。

厭世と樂天

源爲朝を大島に流す、爲朝曰く、天子我に大島を賜ふと、斯の如くにして天下初めて不平なき也。

正行と死

楠正行は初め父の遺命を忘れて死せんとし、美姫の愛情を捨て、死を洩し、戰場に思立ちて死を奏上し、戰場に向ひて死を記す。

忠臣の墓

忠臣平重盛の墓は京都にあり、而して其の名を知つて、其墓を知るもの少く、其の墓を知つて詣づるもの亦甚だ稀也、然らば重盛の忠死は今世の人の同情を買ふに足らざりしか、曰く花やかに飾りある忠義ならざるが故に、やゝもすれば世に忘れられんとする也。

不釣合の墓

若武者敦盛の墓碑は、不細工の五輪塔にして、此苔の下に小枝の笛の主ありとも思はず、若俳優小傳次の墓碑は、一丈五尺の巨石にして、此の石の下に、小女を迷はせし主ありとも思はず。

有難き文句

眞宗僧侶は説教して曰く、一心一向に佛助け玉へと申さん人は、彌陀の

浄土に一足飛びと、借問す、もし賽錢を出さぬ人の口より此の有難き文句を唱へたらんには如何に。

説教の句頭

眞宗僧侶は金儲に巧みなり、故に説教中にも時々賽錢を投げしむる爲に句頭を切る、信徒も此時を幕合と心得、機失ふべからずとして賽錢を投じ、投げ終る時までの繋ぎに、説教者は六字の名號を繰返す、かくの如くにして説教終りたる時、善男善女の財布は著しく軽くなり、甚だ有難く感ず、而して如何なる説教ありしやは素より夢中世、これにて人心を支配する事を得るとせば、世に宗教ほど有難きものはあらず。

勘定の涙

演劇を見て涙を泣けど、目の前に横はれる實地の悲惨には眼もくれぬ人あり、實に道理の合はぬ話なり、されど此泣く泣かぬは、感情より出づるものに非ずして、勘定より出づるものなれば、口へて済む事には泣き、少しにても金が出る事には、我慢にも泣かれぬなるべし。

藝妓の見本

藝妓なるもの、見本はといへば、余は先づ靜御前を推す、雲上人に嚙さ

れて初めて舞ひ、人物を見て之と契り、時に臨んでは武將をも冷罵す、神泉苑の春の遊、吉野の山の冬の別れ、鶴ヶ岡の追慕、一として同情を表されざるはなし、藝妓も此處まで仕上ぐれば、あらゆる婦人の手本として餘りあり、今の淫賣藝妓などの嘗めても見らるゝ話にあらず。

藝妓の情

藝妓の多くは、人を欺きて銀行を立つる程の悪人に非ず、一人に至情をつくす爲に、他の多くの人に虚言も吐く也、金も貪る也、寧ろ他より據なく虚言も吐かしめらるゝ也、金も貪らしめらるゝ也。

藝と場所

俳優が舞臺の上の行儀は、いざといふ場合に應用されず、釋師が見臺の前の辯舌は、亦いざといふ場に役に立たず、されば大守に扮する俳優にして、貴顯の前に不作法を恐れて、一足も動かれぬものあり、名將勇士の軍略を解く釋師にして、役所に税金を持參してさへ、一口もすらくと物の言へぬものあり、日本一の奇術師天一が屢々掴摸難に逢ひし如きも此理に外ならず、それは藝場以外に其藝を應用する程、エラキもの、妙き故なるべし。

醜惡の徒

柳下袖を引く淫賣婦は、絶えず拘留に處せられ、劇壇目を運ばず淫賣男は、更に此沙汰を聞かず、予は風俗を紊亂する比較に於て、取締上後者に嚴ならんことを望む。

悪徒の親分

博徒は常に囚はれ、拘摸も亦常に囚はれ、而して此等犯罪人の親分は此の犯人を養成し、犯罪より得たる不正の金にて、帝都の中央に無事に生活し居れり、物騒千萬の世の中かな。

泥棒の細張

拘摸は人の油断を見すまして、其懷中を覗ふ盜なり、既に盜として罪を犯す以上は、何れの方法によるも可なるべきやうなれど、拘摸には拘摸の規約ありて、萬引、明葉覗ひ、板の間等の如き、他流の盜をなすを耻となすよし、物を盜む拘摸にして、此規約を守ることにあるに、世間規約の反古になる事多きは何ぞや。

同 臭

金を貰うて投票したる議員に向ひ、自家の利害を金に左右せられたりと

て、其不餘操を罵るものあり、これを臭いもの身知らずといふ。

化の皮

近來政治家、實業家、文章家の評判よき所、日々化の皮を顯はして人物の價値を下げつゝあるものゝ如し、化の皮の早く剥がれたるはまたしも心ばへに殊勝の所あり、何處迄も包み果さんとするはなかくに罪深し。

欺と不欺

男にして女に欺かれ、女にして男に欺かる、我は此二者を愛すべき人となす、人の愛に疑を置くものは、己も亦欺かんとする人なればなり。

美人の感化力

熊澤蕃山は深雪と云ふ美人の感化にて、自家の學問を消化したるより、詩も、歌も、俗謡も、文章も巧に出來、伊藤春畝は梅子以下數百の美人の感化にて、自家の智識を消化し、如才なき大政治家となれり。

鏡と顔

コンパス的丸顔に、鼻よりは頬の日當りよき女、白粉塗りたる色の千柿に似たるが、劇場に於て時々鏡を出すを見たり、心の美を寫さんとて

か。

器用なる人

器用なる人は、人間の屑也、故に他より器用なりといはたる時は、己れを侮辱したるものと思ふべし、さるをしたり顔する人は、遂に村の寶となり終る也。

判任官と俳優

大根となる身はよけれど、まびき菜となりて捨てられんば馬鹿らし、判任官となりて人後に立んより、寧ろ俳優となりて座長となるべし。

新躰詩家

新體詩家といはれんには、梅花道人の如きうまき詩をつくるべからず、成るべく虎、龍、星などのいかめしき文字を使ひ、一句々々きれぎれになりて、つちつまの合はぬを最もよしとす。

世の中

世人は猴の冠するを笑ひ、猫の茶を飲むを笑ふ、もしこれを可笑き事とせば、天下に可笑からぬ事はあらじ、それを可笑しと氣附かてこそ、馬鹿馬鹿しき世の中は持てたものなれ。

失意の時

後生の人に羨まるゝ文章は、多くは失意の時代になり、後生の人に羨まるゝ戀愛は、多くは失意の時代になる、すべて失意の時ほど、種々の歴史を造るものはあらず。

習慣

慣れては何事にも苦なし、玉乗の曲飛の如き、營業とはいへ、一たび過ちては二たび得べからざる命を棒にふるなり、斯る危険の事をさへ、慣れては更に恐ろしとも思はざる如し。

流行

流行を趁ふば身代限りの前兆なり、物の流行はもと一時の浮氣より初まりたるものにて、金のある用のなき、輕薄の人が先達となりて、世を驕奢に導かんと。苦心經營の結果なり、故に物の流行を歓迎する人は、輕薄の仲間入をしたる人也。

世態の變遷

函館公園に櫻餅を賣る店あり、店に一人の美しき娘ありて、客足常に絶えず、或時余も此店に立寄りたる事あり、知れる人の紹介にて扁額をば書

與へたりしが、後にて聞けば、此娘は頼山陽先生の曾孫なりと、通常の歴史より行けば、櫻餅を賣る曾孫も、余の愚書の頼氏の家に喜ばるゝ事もあらざるべし、實に不思議の因縁にあらずや。

銀煙管

薄く張りたる銀煙管は、持ちて軽く亦口あたりよし、それを厚くしたるは、見得のやうなれど、賣らん時の心掛にもやと見すかされて、手にせんもいやなり。

頼朝と銀猫

西行法師が銀猫を路傍の小兒に與へたるを、慾氣なしとて譽むる人あり、持餘しものと罵る人あり、銀猫と北面の武士佐藤憲清とを天秤に掛けて見れば、譽むるにも罵るにも當らぬ事也、今の世ならば賣拂ひて旅費の補にする所なれど、それにも及ばぬ當時に、さりとは眼の見えぬ頼朝を、笑へば笑ふべき也、

腦の使用

腦は使ふほど丈夫になるものなり、然るを兎もすれば使ひ過ぎてはとの懸念より、腦にホウチヲをわす事あり、彼の腦病の如きは腦の使用のあまり不平均なるが故に起るものにして、云はれ使ひ方の悪しき故也。

裸體百貫

儒者とならば頼山陽、俳優とならば中村歌右衛門、工人とならば脇坂淡路守となるべし、其藝術の勸工場賣品のならざるが故に、此三人より、學問、舞伎、技術を除去するも、一世の人物たるを失はざる也。

至誠

世は澆季なりと雖も、至誠に敵するものはあらじ、もし敵するものあらば、其人未だ至誠ならざる也、故に大岡忠相の裁判には、極刑に處せらるゝ悪徒も、之に服して更に怨色なかりしと。

忠義

忠義は窮窮なるものに非ず、感情の手足と共に面白く忠義に働かるゝ也、されど人に見せん忠義は、極めて窮屈にせざるべからず、久我通武の俗諺に曰く、祇園島原撞木町傾城狂ひの其の内に、病氣などて死なんしたら、忠か不忠かわかりやせぬ。

散財の甲乙

千万金を散じて吉原の大門を閉つ如きは、天下の大快事也、不幸の娼婦

を擁して強いて笑はしむる如きは、人間最愚の狂言也。

猫の世

猫に小判とは昔の事なり、近來小判をほしがら猫到る處に賞翫され、代議士も詐偽師も、紳士も新平民も、大臣も空米屋も、猫と戯むるゝを名譽とし、猫を半世の友とするもの多し。

妓樓と狂人

妓樓ばかり淋しき悲しき所はあらず、されば此所に浮るゝ多くの人は、この淋しき悲しきに發狂したるものなるべし。

貯金の世

金が造る身分も、今の世には尊とし、故に有難き俳優も、有難き小説家も、セッセと貯金するやうになりて、藝も術も商品になりたり、既に商品となれば、賣口のよきを心懸くるより外は、彼是と云ふが野暮也。

贅澤と高尚

近來服裝の贅澤非常にして、申上げますの馬の脚、露はらひの鹿の子まで、動物製の黒紋付を着る有様ならば、一人並の人、それ以上の人には服裝の比較むつかしく、故に物の好尚により、價格の貴きものを擇ぶやう

になれり、やがて通人なるものなどは、株券の紙衣に紙幣の帯を結ぶやうに至るべし、歎かほしいといふも馬鹿らし。

遊藝

學校にて教ゆる唱歌も遊藝なり、稽古所にて教ゆる淨瑠璃も遊藝なり、而して甲の作必ずしも高雅ならず、乙の作必ずしも野卑ならず、たゞ學ぶべき場所と學ぶ人の如何によつて、自ら上下の區別をなし、甲の遊藝は卒業して其人音曲の美を知り、乙の遊藝は卒業して其人音曲の淫を知る。

賭博

賭博法律に禁じられて、破落漢ますく繁昌、あはれ労働夫一日の骨休めは、忽ち赤襦袢となり、紳士毎日の輸贏は、夜を徹して平氣なるものゝ如し、予は賭博に就て、其器械の發賣を禁するまでに嚴なるが、寧ろ之を空米取引所的に公許するゝかの極端説を持するものなり、其他は多く言ふに忍びず。

今昔の俠客

事の善惡に拘らず、男と見込まれてウンと然諾する人を俠客といふ、昔

の俠客は義の爲に働き、今の俠客は金の爲に働く。

夜店と非人長屋

東京の銀座を賑はす夜店は、後より見れば非人長屋の如し、天下の萬事、正に斯の如くなるべし。

怪有の宗教

屋敷を拂うて田を賣り給へ、テンテラツンの尊とは、某教の宣詞なり、苟も人間の智識を有する者は、いかにも馬鹿々々しく二口とは唱へ得べからず、然るに多少分別あるものらしき人にて、此怪しき宗教を擔ぎ歩き、穢水賣付けを業とするものあり、而して是等の徒の毒舌に欺かるゝもの亦尠からず、もし能ふべくんば、其教會所と共に彼等の惡徒を燒拂はん哉。

高利貸

高利貸を憎みて窃盜に比するものあり、我は寧ろ強盜に比せんとす、而して強盜は貧乏人をいぢめぬだけ。義俠に於て高利貸の上にある。

家屋税

貸家人は借家人に比して兎も角も富饒なるべき人也、故に家屋税は貸家

人の財産に對して課すべきものにして、表面は貸家人が負擔する如きも、慾飽く事を知らぬ財産家なる貸家人は、此税金を口實として、家賃に其税金に數倍する値上をなし、猶貸家人は家屋税に苦情をならし、借家人こそよき面の皮にて、何處までも貧乏人の割のわるき世なる哉。

無責任

萬民は無責任に議員を撰舉し、議員無責任に働く、故に萬機常に賄賂に決す、もし人民より政府に向つて苦情をならせば、政府は濟した顔にて、汝が大任を委託したる議員に問へど、而して此苦情を議員に移せば、彼又すましたものにて、輿論の趣く所如何ともすべからずと、人民遂に宙宇に迷ふ、煎ずれば己等の罪なり。

下品の不公平

樂器の下品なるは三味線、浮瑠璃の下品たるは新内、小曲の下品なるは都々逸、など、下品と名の付くもの多し、抑も下品といふは何れの邊より割出したる、世の中には下品とせずして濟むべきものを無理に下品にしたるもの多し。

耻ならぬ耻

或物は多く買ふを耻とし、或物は少く買ふを耻とす、便利と必要に依つて物を買ふに何ぞ其の額の多少の爲に耻づる事やある、世はかゝる事を耻とし、大に耻とすべき事は、更に耻とは思はぬものゝ如し。

笑の高低

男は高く笑ふべし、邪念腹に宿らず、女は低く笑ふべし、汚心表に出てず。

滑稽

滑稽の上乗なるは、嚴めしき人の鼻の先に飯粒の宿りし如きものにて、初めより笑はせる趣向のものは總べてゼロなり、近來最も笑はされたるは、某寺の板扉のはり書にて、墨くろくくと、

犬の外小便無用

乙な物

これはオツだなどいはるゝ食物は、食はれぬ物を無理から食へるやうにしたものにて、すべて物をオツだなどと賞翫する人は、いづれ乙なる人なるべし、

我慢

我慢に肥瘦あらず、されど我慢は利害に頓着せず、利より不利の事多ければ、利の爲に我慢に堪えぬ人より瘦の字を冠するなり、小野小町は我慢を仕遂げずして誘ふ水あらばいなんといひ、清少納言は我慢を仕遂げて、駿馬の骨も五十金と氣焔を吐く、畢竟我慢のならぬと云ふは、弱虫の墜詞也。

酔狂

酒は酔はんが爲に飲むなり、既に酔ふ、狂するも可なり、其度を失する迄に腹帯を緩める勿れ、此加減の出来ぬ爲に、其人物を下げる如きは、酔はぬ前の意氣地なさを發表して、見苦しき骨頂也。

憤激

人は活かしてそれく、使ひ途のあるものを、無理に殺して捨てたがるが今の人情にして、後日大名をなすものは多くは此殺され損ひ也。

町家の娘風俗

近來町家の娘着かざりたる、恰も猿芝居を見る如く、髪のかざり顔のつくりなどは、みやびて櫻姫かともうたがはる、頭より足の先までを見比べれば、そここの不揃なる、借着したるやうにてをかし。

見にくきもの
若き人の老人くさき、老人の若々しき、男の手鍋下げたる、女の巻煙草吹かしたる、俳優の姿したる若旦那、藝妓の態したるお嬢様、世には見にくきもの多く、數來れば胸わるき事なるべし。

奥様

裏店に住みても、六時三十分の衣裳を着ても、片手に提げたる味噌汁の、譬ひ太郎兵衛氏の妻三舍を避くるも、腰辨當以上の官吏、不徳を働きても遊んで食へる人等の妻となれば、忽ち奥様と稱せらる、或る町家の妻君曰く、まだ奥様といはる、程貧乏はせずと、又曰く奥様といはる、程亭主は悪しき事を働かずと。

夫婦

男女の情の既に夫婦となりては、小説的戀愛の大團圓也、故に意氣相投ずるものあらば、容貌も絲瓜もあつたものに非ず。

縮緬の腰巻

箕子が紂王の象箸に驚きしは、あまり釣合が嚴重なれど、裏店の妻君が、幾瀬の思ひをして漸く巻付けたる腰巻、誰に見せるためかと思はず憤飯

したり、如何に贅澤の世とは云へ、斯ばかり不釣合なるを、他も自ら、さまで耻しき事に思はぬものゝ如し。

箏と三絃

三絃は箏より絃の少き爲め、彈方むづかしといふは、三絃を學びて箏を習はぬ人の聲詞也。箏の糸は三絃より大きが故に高尚なりといふは、琴を弄びて三絃を味はぬ人の言葉也、絃數少き樂器が其彈方むづかしとせば、須磨琴は如何に箏よりは面倒なるべき、絃の細き樂器が其音色下品なりとせば、八雲琴は如何に三絃より下品なるべき、たゞ斯の如く感ずるは人の浮氣にて、むづかしといひ下品といふは、作の優劣と曲の巧拙にあるなり、世のすべての主義なるものも、斯く偏りて主張するもの多きが如し。

唱歌本

現今諸學校に行ける唱歌書を見るに、其十中の八九は、これにても歌かと呆れしむるの外なし、かゝる無趣味の歌よりは、寧ろ四書五經に作譜して歌はする方遙かに優らん。

新の字

新の字は改良の意味ありて、決して不吉の文字に非ず、而るに新俳優、新平民、新華族と敷来れば、新を悪と解釋せられて、あまりめでたき文字とも思はれず、然れば大方の紳士といへるも、此の新の字に改めたし。

彌次馬

今の世には彌次馬多し、パーツン征伐に我身の愚を現はす人はあれど、大に制裁を加へて然るべき人には、更に唾をさへも手向けざるものゝ如し。

酒量

他に出てゝは酒量二合、宅に在つては酒量之に倍す、如何なる料理店に行くも、自宅の料理ほど、我口に適するもの非さればなり。

茶代

料理店宿屋等に行かば、料理代宿料の外に、茶代なる心配あり、抑も此茶代なるものは何時の頃より始まりしか、此等の營業者は豫め此茶代の受取書を印刷し、必ず貰ひ受くるものと合點す、言語同斷の風習ならずや。

被憎口

△潤些 腰間の洋刀、玉散る程の物に非ず、況や天下を蹂躪するにあらざるや。黄線の帽、胸邊の鈕、三太と雖も、お役人と呼ぶ。親爺泣兒を脅すに訴ふるを以てす。三伏の夏、指して最も嫌がるもの、即ち裸體の叱せらるゝを以てなり。就中靴音に膽を寒からしむる者、飯柳河岸出没するの妖怪、呼ぶに鬼を以てす。行燈影暗き裏、艶舌喃々の聲、忽ち消えて寂寥なり。威權尤も昂し、車夫を叱責する態、御厄介なり、醉漢の説諭、御苦勞千万、寒夜一睡をだも、催すを得ず、御勿體なや、是れ人民保護、收入唯知る指八本、大喝一聲百雷の如き者、出火に駈附る野次馬を制するの際、得意の威權是れ非常權。

△置算 見事也、丸鬚の大きやかなる、幾度か洗濯にかゝる羽織のやれ、黒縞子の帯色を變じて、是れ六時三十分の觀、いくその艱苦顔の瘦に見ゆる、乳兒は背に、三歳兒は手を引き、片手に提げる味噌瀉の中、太郎兵衛の鳴三舎を避く、況やお組合に於てや。十時メ切は是れ路次の憲法、井戸端會議に呼ぶに奥様と崇む。流石は腐ても鯛は鯛、蛟龍長く溝池の者ならんや。如何せん將た浮む瀬のなきを、經濟の重荷、戀の重荷と競べものにならず、折々の述懐、是れても元は士族の娘。

△餓堂 牛北書を能くして名聲振はず、金錢の爲唯命是れ従ふ、其醜見るに堪へず、吉原遊廓の襖、恐るべし安賣の弊、其徳を害ふ、餓堂の徒、元來論ずるに足らず、提灯流然たるものはた判下者流のみ、風韻氣骨に乏しき處、恰も一椀の粥に露命をつなぐものゝ如し。蜿蜒蚯蚓の如く、枯瘦たる字體、干菜の如し。凡眼を欺く者、醜婦の化粧するに似たり、龕岳獸克は沙汰の限り、此輩をして呼ぶに能書を以てせば、道風行成、地下に泣かん。

人生と山水終

明治三十八年五月十二日印刷
明治三十八年五月十五日發行

定價金二十錢

著 者
所 有 權

編 者 中 川 愛 氷

發 行 者 東 京 市 神 田 區 錦 町 一 丁 目 十 番 地 大 月 隆

印 刷 者 東 京 市 牛 込 區 市 谷 加 賀 町 二 丁 目 青 木 弘

印 刷 所 東 京 市 牛 込 區 市 谷 加 賀 町 一 丁 目 株 式 會 社 秀 英 舍 第 一 工 場

東 京 市 神 田 區 錦 町 一 丁 目 十 番 地 文 學 同 志 會

大 阪 市 江 戶 堀 上 通 一 丁 目 一 九 番 邸 (電 話 本 局 千 〇 九 十 三 番)

文 學 同 志 會 大 阪 支 部

發 兌 元

●●文學同志會出版圖書目錄●●

美 妙	人生の氣力	人生の初旅	人生の老旅	人生の悔悟	人生の片影	人生の目的	人生經濟學
定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅
四十錢 二十錢	六十錢 三十錢	四十錢 二十錢	四十錢 二十錢	四十錢 二十錢	二十錢 十錢	廿五錢 十四錢	二十錢 十錢
人物の裏面	人生の情事	吾人の生活	山高水長	風月萬象	斷巖絕壁	枕頭の山水	松風吟月
定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅	定價 郵稅
四十錢 二十錢	四十錢 二十錢	廿五錢 十四錢	四十錢 二十錢	廿五錢 十四錢	三十錢 十四錢	二十錢 十四錢	三十錢 十四錢

滑稽妙文集	戲曲妙文集	吞氣文集	高等艶麗文集	立身の事蹟	研學の順序	青年の將來	作文指南	山水記事論說文
定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價卅錢 郵稅六錢
社交記事論說文	高等記事論說文	偉人の膽力	偉人の生長時代	傾才の詩人	深窓の佳人	婦人實務錄	女子講本	活戀
定價卅錢 郵稅六錢	定價卅錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿二錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價三拾錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢

斬奸狀	急務檄言	東洋社會黨	最近國家社會主義	社會研究新論	近世社會主義評論	萬情萬眉	悲哀の快觀	郊外散策
定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價六十錢 郵稅六錢	定價十圓 郵稅十圓	定價十一圓 郵稅十一圓	定價十六錢 郵稅四錢	定價卅錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢
馬琴妙文集	日佛敎拾二傑傳論	聖僧道元	禪學斷片	活禪錄	活精神	活學談	虛心談	精神と力量
定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢

戀と死	墳墓の地	失策の半生涯	成功秘訣	處世四十八手	天籟萬丈	小文學	小氣燭	小哲學
定價二十錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅八錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價十二錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價四卅錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢
本珍 鳴長明海道記	國史 資料 回國雜記	理想の大臣	禪學の奧義	哲學要領	加賀の千代	成效者の苦學	軍隊の側面	理想の政黨
定價十五錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅八錢	定價六十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價四卅錢 郵稅四錢

高等家庭讀本	戀愛の精神	人情の後見	無能の天下	社會學講義	社會學と哲學	吾家の憲法	人生の審美	文學の審美
定價廿四錢 郵稅四錢	定價卅六錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價六十錢 郵稅十錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢
自然界の審美	婦人の情力	戀愛の文豪	弱者の臨終	英雄の片影	心識活談	詩經新體詩選	詩の神	學生の苦心
定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢

心學養性篇	心學道體篇	心學人間篇	心學道義篇	心學迷悟篇	心學性理篇	心學明德篇	心學靈性篇	俳流の女神
定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢	定價四廿錢
箴言	高等秀才文集	奇僧の片影	高等才媛文集	風彩と審美學	審美學要義	高等美文斷片	女子美文斷片	心琴
定價四廿錢	定價廿二錢	定價廿五錢	定價三十錢	定價三十錢	定價三十錢	定價廿五錢	定價廿五錢	定價二十錢

馬琴旅行文集	秀才記事論說文	中等作文組立法	美文組立法	近松妙文集	西鶴妙文集	爲永妙文集	芭蕉妙文集	立身冒險談
定價卅六錢	定價卅六錢	定價卅五錢	定價卅五錢	定價卅五錢	定價卅五錢	定價卅五錢	定價卅五錢	定價卅五錢
名流の家憲	社會學問答	社會學と事業	超然教育學	軍人と膽力	軍歌集	處世の歌	征露の歌	征露詩集
定價廿五錢	定價三十錢	定價三十錢	定價二十錢	定價二十錢	定價十二錢	定價三錢	定價二十錢	定價十五錢



